特集・伊藤一彦を知る

伊藤一彦先生の声

堺雅人（俳優）

伊藤一彦先生は僕の恩師だ。高一のとき、現代社会をおそわった。

おぼえているのは、先生のよく通る、ひくい声だ。どんな文章も、先生によんでもらうと、なんだかスッと頭に入った（ような気がした）。ちゃんと理解できたかはともかく、ソクラテスの「汝自身を知れ」も、親鸞の「善人なおもて往生をとぐ」も、僕は先生の声で初めて触れたことになる。なんという贅沢だろう。

先生は、ちょっと変わった先生だった。たとえば伊藤先生だけいつも自転車通勤だった。台風の日も、くろい雨ガッパで、僕ら生徒と一緒に登校された。また、先生は職員室でなく、西のはずれのカウンセラー室にひとりでいた。クラスをうけもつこともなかったし、部活動の顧問でもなかった。あんまり先生らしくない先生というか、大人らしくない大人だった。

もしかすると、先生に大人の印象がないのは、先生の思い出話に自分を重ねていたからかもしれない。

「早稲田の下宿で飲みながら、友人と『人のために死ねるか』という議論になってね。ひとりが『俺は死ねる』と言うと、『じゃあ俺のために死ね』と誰かに言われたんだよ。『わかった、死んでやる』と線路に飛び込もうとして、いやあ、あの時は止めるのが大変だったなあ」

先生のこんな話をききながら、僕は数年後の自分をボンヤリおもいえがいていたはずだ。

先生のやさしい、あたたかな声を通して、僕はいろいろな世界をしった。宮崎の高校にかよう十六歳の僕にとって、先生はソクラテスで、親鸞で、東京で、未来の僕だった。

三十年たった今でも、先生はいろいろなことを教えてくれる、大切なかただ。もっとも今は、そとから窓ごしに実家をのぞきこむように、先生は、ふるさとや、青春そのものにもなっているのだけれど。